

Young Children

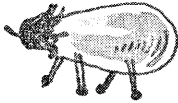
August 1973

Childhood Education

March 1973

Saturday Review

Nov. 1973 より



江波 諄子

今回は、アメリカの文化人類学者として著名なマーガレット・ミード女史が、最近の NAEYC の集りでどんなことをいつているかに耳を傾けて、それからわが国でも近ごろ話題になり出した Open Classroom Education について、アメリカにおける人々の受けとり方をいくつかご紹介しよう。

ミード女史は講演 (Young Children, August 1973 記載) を「子どもの社会化は多様性をより受け入れる方向に導く得るか」と題して多様性 (Diversity) と継続性 (Continuity) の重要性を説いています。

第二次世界大戦後、アメリカ人は彼らのあらゆる問題に対する解決や技術や教育や医薬を世界中の誰にも与えることができ、効かせられると信じていました。「Catch up」つまり「追いつく」という言葉は一九五〇年代には非常によく使われていました。そして誰もがみんな同じ物を使って、同じ物の中で生活することに興味を持っていました。もし、どんな型の教育でもそれがはやると、その他の世界の人々も無理にその方式をとるよう押しつけられました。

ニューギニアの原住民は、一九五三年にはアメリカ社会の模写を彼らの社会にとり入れようとしてきました。民族衣装

は脱ぎすて、ダンスは踊らないで、ズボンをはき誰もが学校へ行き始めました。しかしミード女史が一九七一年に三度ニューギニアを訪れてみますと、人々は再び頭の上に葉っぱや花を物を飾り、昔ながらのダンスをしていたのでした。彼らがいうには「十二歳まで子どもを学校へ通わせ、それからどうする？ それ以上のお金もないし学校もないし、その上十二歳は結婚するにも、一人前に働くにも小さすぎる」と。ニューギニアの人々は現代のアメリカ社会が当面している問題に、早くもつきあたってしまったのでした。紙と鉛筆のみが優先する唯一の出世の道への方法は、非常に危険な要素を含んでいることを説いています。

現在のアメリカでは誰もが教育教育と傾き、大学の学部だけで終わるのはまるで *top out* (中途退学) の感さえ持たれます。昔、「グリーン革命」といって世界のどこでも育つ米や麦の品種が改良され、奇蹟の米とか奇蹟の麦とか呼ばれました。しかし、ひとつの品種のみを植えるとか豊作の時はいいのですが、災害にあつたら収穫はなくなってしまう。東アフリカの農夫は、異なった品種を異なる土地に植え、毎年必ず少しずつの収穫を得るといいます。

す。ミード女史は、今はちょうどアメリカがこの奇蹟の米や麦をつくった時代とよく似ているといっています。

問題をもう少し幼児教育の具体的な所におろしてきますと、アメリカは過去十年間誰をも同じように教育し、またそうできるように努力してきました。その考え自体はすばらしいのですが、方法論において誤っているといえます。ひとりひとりの子どもはすべて異なったバックグラウンドからきたのに、自分にあるもので人にならないものを押しつけて、みんな同じようにしようということの危険を、アフリカ人の米の収穫の仕方をとって説明した訳です。ですから、たとえばフィンガーペインティングは家具でぎっしりうまった小さいなアパートメントに住んでいる子どもにはよくても、田舎の戸外で終日どろんこ遊びなどをしている子どもにはそれほどでもないということなのです。

—安全は多様性の中に存在する—、これが女史のいいかけたことのひとつで、多様化と社会化の中でわれわれは、子どもが何を持っていて何が必要かを知ることによつて、ひとりひとりの子どもを育てていかなばならないといっております

女史が掲げようとしたもうひとつの点は、“Continuity”

(継続)の問題です。家庭という小さな単位の中でも、夫と妻は普通全く異なるバックグラウンドから来ておりますし、その中で子どもたちがテレビ番組の「セサミ・ストリート」などを見せられることは悪くないのですが、子ども

たちの先生はほとんどみておりませんし、両親もその時間はたいてい忙しくて見ておりません。子どもは同年齢の子どもとの共通の話題はテレビから得ても、両親や先生とわかち合う話題を持つことが非常に少ないのです。子どもたちが毎日、毎時間何を話して何をしているのかを知ること、われわれ大人たちがしなければならない最も大切なことのひとつです。そして、断絶した世の中で少しでも継続性を保つために、保育所や託児所などに手のあいた老人が来られるようにするのは、ひとつの方法であるといえます。老人はそれほど力はありませんが、子どもたちを見つめ、すわってお話をするだけでもできます。これは職業的にもある程度成り立つことでしょう。

以上の二点がミード女史の講演の要点であるようにでした。さて次に、今話題の“Open Classroom Education”についてアメリカにおける反応を *Childhood Education* (Mar.

1973) と *Saturday Review* (Nov. 1973) の中の記事を中心にご紹介いたしましょう。

オープン・クラスルーム教育は今から十年ほど前にイギリスで、小学校の学習形態のひとつで *informal classroom* として始まりました。その教育哲学は、①自由、②尊厳、③個々の子どもへの注意、ということでした。これがアメリカに入って来て *open classroom* となり、その根本思想は、

- ①子どもは生れつき好奇心が強く、大人が始終監視していなくても探究する。
  - ②幼児期に子どもが学ぶ初歩的な方法として、遊びは仕事と区別されない。
  - ③学習は常に反応のある刺激を与える環境の中にあり、先生が教えている時だけではない。
- ということでした。

オープン・クラスルームにはいろいろな活動をする場が設けられています。たとえば、カーペットの敷いてある床。本やおもちゃを持ってはいまわれるこじんまりした居心地よい場所。芸術とか数字の活動するのに必要な材料やテーブル。砂や木工道具やバッテリーやバルブや動物、

植物などの教材が部屋の中に準備にされています。

このようなクラスルームにおける先生の役割は、①子どもに材料を提供する、②ひとりひとりの子どもの進歩を観察し記録する、③必要な時に手をかしながら子どもから子どもへと動く、④子どもが自分の仕事をひとりですべてできるように学習を支え、準備する、となっています。

こうした考えの下でイギリスでは理想的な教育が行われるようになったのですが、これがアメリカに入って来た時の過程とその後の問題点を、Roland S. Barth 氏（マサチューセッツ州のニュートンという所にもある Angier School の校長）は、“Should We Forget About Open Education”と題して指摘しています。

それによりますと、もともとイギリスではこのような学習形態を“informal classroom”と呼びまして、そのやり方をはっきりと定義することはしませんでした。しかし子どもや彼らの学習過程について先生の信念が一致して、各クラスとも非常によく似ています。それに対してアメリカでは、オープン・クラスルームでの学習方法を詳しく分析し、教材や用具を規定し、先生の行動の限界を成文化し、きちんとした用語集などをつくりましたが、それにも

かわらず各クラスルームでは、その先生の特定の興味を反映して、子どもたちの学習内容はさまざまに異なっています。その上、オープン・クラスルームで教える先生の多くは、いかに子どもを観察し、何を観察し、観察したものについていかに反応して教授を修正するか知らないといえます。イギリスでの成功の原因は、上手な観察や診断、それらから豊かな情報を得、子どもの学習を助け、材料や経験の広さで子どもたちに反応する先生がいるからで、その意味でアメリカの教師の質と比較しています。カナダにある Simon Fraser 大学の Selma Wassermann 教授は、オープン・クラスルーム教育をするには、まずそこで教える先生を教育しなければならぬとして、大学における教師養成のためのオープン・クラスルームを Childhood Education (March 1973) に紹介しています。その中で彼は、「先生というものは教えるようにいわれたことを教えるものではなく、自分自身が教わったように実際には教えるものである」という言葉を引用し、将来小学校の教師になろうとする学生を実際の授業形態の中で、つまり講義でなく実際に子どもたちが学ぶような形態で、まず未来の教師自身が学んでみる方法を行っています。このような大学におけ

る授業形態の中で、学生はさまざまな教育資源をつかって自分自身を教えることが要求されます。もちろんその上ゼミナーなどで話し合いを通して研究するわけで、ほとんどの学生の最初はとまどうが後には、このような学習形態に對して非常に肯定的な考えを持つようになるかと報告しています。

以上の少数の記事から得る、アメリカのオープン・クラスルーム教育の問題点は、おもにそこで教える教師にあるようで、この点について、先の講演会でマーガレット・ミード女史は、ひとりの子どもをひとりの先生が一年間みるというのではなく、"Team Teaching" という方法を提案しています。あまりに多すぎもしない幾人かの先生によって子どもたちの学習に変化を与えることは重要性を説いています。

さて、*Saturday Review* の中の Barth 氏のオープン・クラスルーム教育に対する意見の結びは次のようになっていきます。

彼は、イギリスから入って来たこういう授業形態は、それまで何の疑問もなしに行っていた古い授業形態目からきめさせ、イギリスでのあいまいな概念をはっきりさせるこ

とになった利点は認めるが、現場においては実際に真のよいオープン教育方法が行われていないので、Open か Traditional かの論争は危険でみにくいものであると考えます。そして大切なことは、教師が自分のクラスを注意深く調べ、子どもが学ぶのに何が必要かを決定し、そして自信と想像力と勇気を持つことの方がより困難ではあるがやりがいのある革命的な方法であるといい、教師の Sensitivity (感受性) と Boldness (勇敢さ) の大切さを主張して、それは現行のオープン・クラスルーム教育からは生れてこないと結んでいます。

西欧の新しい物の考え方や方法をたやすく取り入れやすい日本においても、現在アメリカで行われている論争や試行は、明日の私たちにとって十分知るのに値するものではないでしょうか。

(十文字学園女子短期大学)